

## 十卷章の不読段に関する一考察

— 近現代の学匠・著作を中心に —

佐々木大樹

### 一 はじめに

十卷章とは、弘法大師の著作である『弁頭密二教論』二卷、『即身成仏義』一卷、『声字実相義』一卷、『卍字義』一卷、『秘蔵宝鑰』三卷、『般若心経秘鍵』一卷に、『発菩提心論』一卷を加えたものの総称である。この十卷章は、『釈摩訶衍論』や『大日経疏』(口疏)とともに、真言教相の書と位置づけられ、初学者は必ず学ぶべきものとされてきた。初学者は、まず師に従い十卷章の素読の訓練を受け、その上で内容理解に入ることを習いとしてきた。ただし十卷章の中でも、事相に深く関わる記事については「不読段」と呼び、初学者(特に未灌頂の者)による講読、時には素読すらも禁じられた。

不読段は、『弁頭密二教論』『即身成仏義』『秘蔵宝鑰』『発菩提心論』に含まれている。<sup>(2)</sup> 不読段が設けられた理由は必ずしも明確ではないが、事教双修のもと、真言密教を誤りなく伝承する意図があったものと推測される。

江戸時代までは、十卷章中の不読段について、基本的に註釈等が行われることはなかった。しかし、明治以降、十卷章に関する書籍が出版されるようになり、不読段の訓読・現代語訳が公開されるようになった。このような流れの

中で、不読段と断つた上で、必要最低限の註釈・解説を行う形が徐々に定着していった。昨今では、不読段の註釈や講義が自由になされ、不読段の伝統に言及されることも稀になったとの印象を受ける。

不読段の伝統は、その意義等が十分に検証されぬまま、時代の趨勢におされ、世に開示されたのが実際であろう。不読段は、真言密教の核心、その継承に深く関わる事項であり、その意義を検証することは、真言教学を再考する上で重要と思われる。

本論では、このような問題意識のもと、明治・昭和に刊行された十巻章の解説書を精査し、近現代の学匠が、いかに不読段の伝統を受けとめ、どのような態度をとったのかを明らかにしたい。またこのような検証を通じて、明治以降、いつ頃から不読段の伝統が希薄になったのか、その経緯を辿ることも可能であろう。まず十巻章における不読段の位置を確認してゆきたい。

## 二 十巻章における不読段

今回、筆者が近現代に活躍した諸学匠の著作を検証したところ、十巻章における不読段の範囲は一様ではなく、広略等の異同があることが判明した。ここでは便宜上、不読段の伝承の中でも、もっとも広範なものを示し、一々の異同については後述したい。

### ◎『弁頭密二教論』下巻

密教の諸経軌を引いて、顕教に対する密教の優位性を示す一段である。具体的には、即身成仏を実証するものとして入壇灌頂の事作法に言及する。

【弁①】不空訳『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（五秘密儀軌）<sup>5</sup>

「若依毘盧遮那佛自受用身所説内證自覺聖智法及大普賢金剛薩埵他受用身智。則於現生遇逢曼荼羅阿闍梨。得入曼荼羅。爲具足羯磨。以普賢三摩地引入金剛薩埵入其身中。由加持威德力故。於須臾頃當證無量三昧耶無量陀羅尼門。以不思議法能變易弟子俱生我執種子。應時集得身中一大阿僧祇劫所集福德智慧則爲生在佛家。纔見曼荼羅則種金剛界種子。具受灌頂受職金剛名號。從此已後受得廣大甚深不思議法。超越二乘十地」<sup>(6)</sup>

【弁②】金剛智記『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』（瑜祇經）

A 「金剛界遍照如來以五智所成四種法身。於本有金剛界金剛心殿中。與自性所成眷屬乃至微細法身祕密心地超過十地身語心金剛等」<sup>(8)</sup>

B 「諸地菩薩無有能見俱不覺知」<sup>(9)</sup>

【弁③】不空訳『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』（分別聖位經）<sup>(10)</sup>

「自受用佛從心流出無量菩薩皆同一性謂金剛性。如是諸佛菩薩。自受法樂故各説自證三密門」<sup>(1)</sup>

【弁④】不空訳『略述金剛頂瑜伽分別聖位修證法門』<sup>(12)</sup>

A 「亦是入一切如來海會壇受菩薩職位。超過三界受佛教勅三摩地門。具是因緣頓集功德廣大智慧。於無上菩提皆不退轉。離諸天魔一切煩惱及諸罪障。念念消融證佛四種身。謂自性身受用身變化身等流身。滿足五智三十七等不共佛法門」<sup>(13)</sup>

B 「自受用佛從心流出無量菩薩。皆同一性謂金剛性。對遍照如來受灌頂職位。彼等菩薩各説三密門。以獻毘盧遮那及一切如來。便請加持教勅。毘盧遮那佛言。汝等將來於無量世界。爲最上乘者令得現生世出世間悉地成就。彼諸菩薩受如來勅已。頂禮佛足圍繞毘盧遮那佛已。各還本方本位成爲五輪持本幟幟。若見若聞若入輪壇。能斷有情

五趣輪轉生死業障。於五解脫輪中從一佛至一佛供養承事。皆令獲得無上菩提成決定性。猶如金剛不可沮壞。此即毘盧遮那聖衆集會。便爲現證窈都婆塔。一一菩薩一一金剛各住本三昧住自解脫。皆住大悲願力廣利有情。若見若聞悉證三昧。功德智慧頓集成就矣<sup>(15)</sup>」

【弁⑤】金剛智訣「金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經」<sup>(16)</sup>

「一時薄伽梵金剛界遍照如來以五智所成四種法身於本有金剛界自在大三昧耶自覺本大菩提心普賢滿月不壞金剛光明心殿中與自性所成眷屬金剛手等十六大菩薩。及四攝行天女使。金剛內外八供養金剛天女使。各各以本誓加持自住金剛月輪持本三摩地幪幪。皆以微細法身祕密心地超過十地身語心金剛各於五智光明峯杵。出現五億俱胝微細金剛。遍滿虛空法界。諸地菩薩無有能見。俱不覺知。熾然光明自在威力常於三世不壞化身利樂有情無時暫息以金剛自性光明遍照清淨不壞種種業用方便加持救度有情演金剛乘唯一金剛能斷煩惱以此甚深祕密心地普賢自性常住法身攝諸菩薩唯此佛刹盡以金剛自性清淨所成密嚴華嚴以諸大悲行願圓滿有情福智資糧之所成就以五智光照常住三世無有暫息平等智身」<sup>(17)</sup>

◎『即身成仏義』

即身成仏に関する二頌八句のうち、「三密加持速疾顯」について密教の諸経軌を引用する一段であり、灌頂等の事作法に言及する。

【即①】不空訳『金剛頂一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌』（一字頂輪王儀軌）<sup>(18)</sup>

「此毘盧遮那佛三字密言共一字無量。適以印密言印心成鏡智速獲菩提心金剛堅固體。印額應當知成平等性智速獲灌頂地福聚莊嚴身。密語印口時成妙觀察智即能轉法輪得佛智慧身。誦密言印頂成成所作智證佛變化身能伏難調者。

由此印密言加持自身成法界體性智毘盧遮那佛虛空法界身<sup>(19)</sup>

【即②】不空訳『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』（觀智儀軌）<sup>(20)</sup>

「入法身眞如觀一縁一相平等猶如虛空。若能專注無間修習。現生則入初地頓集一大阿僧祇劫福智資糧。由衆多如來所加持故。乃至十地等覺妙覺具薩般若。自他平等與一切如來法身共同。常以無縁大悲利樂無邊有情作大佛事」<sup>(21)</sup>

【即③】不空訳『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』<sup>(22)</sup>

「若依毘盧遮那佛自受用身所説内證自覺聖智法。及大普賢金剛薩埵他受用身智。則於現生遇逢曼荼羅阿闍梨得人曼荼羅。爲具足羯磨以普賢三摩地引入金剛薩埵入其身中。籍加持威德力故。於須臾頃當證無量三昧耶無量陀羅尼門。以不思議法能變易弟子俱生我執種子。應時集得身中一大阿僧祇劫所集福德智慧。則爲生在佛家。其人從一切如來心生。從佛口生。從佛法生。從法化生得佛法財。法財者謂三密菩提心教法纔見曼荼羅能須臾頓淨信。以歡喜心瞻觀故。則於阿頼耶識中種金剛界種子具受灌頂受職金剛名號。從此已後受得廣大甚深不思議法超越二乘十地。此大金剛薩埵五密瑜伽法門。於四時行住坐臥四威儀之中無間作意修習。於見聞覺知境界人法二空執悉皆平等現生證得初地漸次昇進。由修五密於涅槃生死不染不着。於無邊五趣生死廣作利樂。分身百億遊諸趣中。成就有情令證金剛薩埵位」<sup>(23)</sup>

【即④】不空訳『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』<sup>(24)</sup>

「三密金剛以爲增上縁。能證毘盧遮那三身果位」<sup>(25)</sup>

◎『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（発菩提心論）

三摩地段と呼ばれる箇所、密教の親行として月輪観・金剛界曼荼羅・阿字観・三密行・五相成身観などの事相に言及する。

【菩】

「第三言三摩地者。眞言行人如是觀已云何能證無上菩提。當知法爾應住普賢大菩提心。一切衆生本有薩埵爲貪瞋癡煩惱之所縛故。諸佛大悲以善巧智說此甚深祕密瑜伽。令修行者於内心中觀日月輪。由作此觀照見本心。湛然清淨。猶如滿月光遍虛空無所分別。 ……（中略）…… 此菩提心能包藏一切諸佛功德法故。若修證出現則爲一切導師。若歸本則是密嚴國土。不起于座能成一切事。讚菩提心曰  
若人求佛慧 通達菩提心 父母所生身 速證大覺位」<sup>(26)</sup>

◎『秘蔵宝鑰』

『発菩提心論』からの引用であり前記参照。

【宝】『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』<sup>(27)</sup>

「又龍猛菩提心論云。第三言三摩地者。 ……（省略）……」<sup>(28)</sup>

以上、十卷章中の不読段について概観してきた。諸先学が指摘するように、いずれの不読段も事相、すなわち密教の実践・儀礼に深く関連する内容であるが、その事相の傾向については相違が見られる。

『弁頭密二教論』および『即身成仏義』の不読段は、灌頂儀礼に深く関わるものが特徴である。しかも、それは密

教の経軌からの引用であり、とりわけ『五秘密儀軌』（弁①・即③）、『分別聖位経』（弁③④④）、『瑜祇経』（弁②⑤⑤）が多用されている。一方の『発菩提心論』および『秘藏宝鑰』の不説段では、主に『金剛頂経』『大日経』にもとづき、観行（瑜伽行・曼荼羅諸尊を観想する観想法）に特化している。経軌の引用は少なく、むしろ観行に関する記述を経軌から抜き出し、簡潔に再構成したものと考えられる。

### 三 近現代の学匠と不説段

明治以降に刊行された十卷章の解説書等は数多いが、不説段に言及する学匠・著述はそれほど多くない。以下、『弁頭密二教論』『即身成仏義』『発菩提心論』『秘藏宝鑰』の順に、不説段に関する記述を列記し、近現代の学匠がいかに不説段を受けとめたのかを確認してゆきたい。なお引用が、前項のいずれの不説段に対応するものかを明らかにするため、その冒頭に略号【弁①】～【弁⑤】や【即①】～【即④】等を付した。

#### ◎弁頭密二教論

○『昭和新纂 国訳大蔵経』宗典部第二卷（一九二九年）<sup>(30)</sup>

【弁⑤】【三】 以下の文は眞言宗にては普通に「不説」として未灌頂の者には素読すら許さざるものなり。されば高野山の宥快師の鈔等には此箇処の注釈なし」（六〇～六一頁、註二）

○高井観海「弁頭密二教論講義」（一九三四年）<sup>(31)</sup>

【弁①】「次に『若依毘盧遮那乃至超越二乘十地』と言う一段は前述頭劣に対して密勝を釈する一段であるがこの文は事相に属するものであるから教相の談にはこれを講読しない事となつて居るから、今もこれに対する説明を略

し、ただ単に前述の如くこの中『依毘盧遮那仏自受用身所説内証自覚聖智法』と言う一句が当経を引証せられた目的である事を説明したのに止めることとする」(四九〇頁)

【弁②③】「而して瑜祇経並に聖位経の文については、密教の内容を顕す点よりすれば、種々説明しなければならぬものであるが、此等の文は密教の事相に亘るものであるから、実際に於いて実相を履修した人でないとその真意を理解する事が出来ないから古来これを不読段と称して教相の時は解釈しない事になって居るから、今は前述の如く当論々述に重大な役割を持つ文だけを挙げ論述の道筋を示すに止めた次第である」(四九三頁)

【弁④・A】「この一段の文に、宗の大意等の四段あることは、宗祖大師の細注の如くである。その中、宗の大意を明す一段は初めに前述の如く、真言密教の教法が法身所説の法門であることを明し、次に行者に約して頓成頓悟の仏地の三摩地門であることを明して居るけれども、この一段は古来不読に属するから、その説明は省略することとする。」(四九八頁)

【弁④・B】「…而して此の一段は自相(マ)に涉つてこの深義を明して居るから、その一々の説明はこれを省略することとする」(五〇〇頁)

【弁⑤】「即ち今の文には、法身には四種身あること、又その住処、眷属を明し、またこの法身には三密を具足して二利の行業を成す事を説いて居るから、これに依つて法身の有色有形を釈せんとするものである。然し乍らこの一段は、古来不読段に属して居るから、一々の釈はこれを省略することとする」(五〇八頁)

○亀井宗忠『国訳一切経』諸宗部二〇(一九三七年)<sup>(註)</sup>

【弁①】「…然れどもこの一段は、密教の事相に互るが故に、実際に履修せし人に非ざれば、その真意を理解する能はざるを以て、古来これを不読段と称し、教相談義には講読せざるを例とするが故に、今もこれに対する解釈を略することとする。要問の者は講伝門に入つて学ぶべし」(三八一頁、註四三)



【弁②③】「…而して此の一段は古来不説段に属するが故に、以上に止めて一々の釈はこれを省略することとする」(三八二頁、註四六)

【弁④】「…この一段の文は、宗の大意等の四段あるは、高祖の細註に依つて明かなり。その中、初の宗の大意を明す一段は、古来不説段に属するが故に一一の釈はこれを略することとする。」(三八三頁、註五〇)

【弁⑤】「…但しこの一段は、古来不説段に属するが故に、一一の釈はこれを省略す」(三八五頁、註五七)

○小田慈舟『十卷章講説』下卷(一九八五年)<sup>(33)</sup>

【弁①】「引証の文は初めに顕教は三乗一乗を論ぜずいずれも三劫成仏の域を出ないことを説き、次に「若し毘盧遮那」以下に秘教の頓成の義をのべている。この説文は入坦灌頂の事作法に関する故に事相の領域として教相談義にはこれが講授を省略するのが高野山の古来の伝習である。故に宥快鈔等には釈を欠ぐ。しかし頼我の口筆下第二、等空の裨蒙下、戒定の註釈下など、南山の学者以外の先徳の註書にはこれを釈している」(下卷、六八七～六八八頁、講義の項)

○那須政隆『辯頭密二教論』の解説(一九八七年)<sup>(34)</sup>

【弁①】「若し毘盧遮那仏自受用云云」これから下は即身成仏の実際の作法が説かれているので、不説段と言つて、普通の公開講演には講読しないことになっている。それで今もその伝統的法規に従つて、解説のペンを中止するの外の外ないが、ただ次の「若し毘盧遮那仏自受用身所説の内証自覚聖智の法云云」の一節だけ、簡略に解説してこう」(二一八頁、解説の項)

「以下は不説段であるから省略するが、一般の人で秘密法を希望される向は、真言密教の専門教師に遇つて、指導を受けられることをお勧めする」(二二九頁、大意の項)

「かくの如く『瑜祇經』の文も、『聖位經』の文も、共に法身仏の自境界を象徴的に表現した秘密法門であるから、普通の公開講義には、不説段として講じないことになっている」(二二三頁、解説・大意の項)

【弁②③】「かくの如く『瑜祇經』の文も、『聖位經』の文も、共に法身仏の自境界を象徴的に表現した秘密法門であるから、普通の公開講義には、不説段として講じないことになっている」(二二二～二二三頁)

【弁④】「しかし宗祖は、前に引証したのは、要点のみの断片であったので、ここに重ねて具文を引いて、法身自内証法門の内容を悉知せしむると共に顕密二教の教益の勝劣を示さんとせられたのである。墮<sup>(3)</sup>つて此の一段にも不説段が多いので、大要を紹介する程度にとどめる」(二二七頁)

【弁④・A】「亦是れ一切如来の海会」より「不共の仏の法門を満足す」までは、即身成仏の境地に入住する具体的作法を説く一段にして、真言門の大秘密である。だから、古来不説段として普通の講義には説解しないことになっている」(二二七頁)

【弁④・B】「次に「自受用仏」より「功德智慧頓集成就す」までは、宗祖の註解に依れば、自性身の説法及び得益を説く」とせらる。法身如来が自受法楽のために自眷属と共に各「おのおの」三密門を説き、即身頓成の曼荼羅法界を現成する、これが即ち真言門の秘密法門である。此の一段も不説段である」(二二九頁)

【弁⑤】「この経文も古来不説段になっているので、詳細な解説は差しひかえるの外ないが、引証の経文は、『瑜祇經』の最初の謂わゆる五成就段である」(二三二頁)

## ◎即身成仏義

○高井觀海「即身成仏義講義」(一九三四年)<sup>(35)</sup>

【即①～④】「この三密加持速疾顕の實際的修法は密教の所謂事相に属するものである。我が宗祖大師はこれを立証

するに以下四箇の経文を引証してあるが、これには阿闍梨の口伝を要するから教相顕露の談には古來講義せぬことに成つて居る。」(五五頁、講説の項)

○吉祥真雄『即身成仏義講説』(一九三四年)<sup>(36)</sup>

【即③】『五秘密儀軌』の「即於現生」以下の文は、毘盧遮那自受用身自内証の法を説かれたる十八会の法及び特に金剛薩埵の他受用身の三昧に住して説かれたる五秘密法門の趣旨によりて説述せられてあるから「若依」と云ふのである。此の一段は灌頂作法などの秘密に互るから、普通の講義には解釈せないのである。」(一〇九頁)

○小田慈舟『十卷章講説』上(一九八四年)<sup>(37)</sup>

【即③】「五秘密瑜伽儀軌の今の引文は弁顕密二教論下にも引くが、高野山では教相不読段と称してこれを講じていない。その理由は入坦灌頂のことを明かすからである。しかし即身義の末註書の中頼瑜・杲宝・宥快等の諸学匠の鈔物には註釈を加えている」(上巻、一〇九〜一一〇頁、講義の項)

○那須政隆『即身成仏義』の解説』(一九八〇年)<sup>(38)</sup>

【即①〜④】「その証拠の経文が以下に四箇挙げられてあるが、それらの経文は、阿闍梨(師範)の伝授を受けなければ、解らない点があるので、古來(不読段)と称し、一般の公開講義には、この部分を省略することになっている。しかし、この度は種種の方が読者となつていられるし、また筆者の私自身としても、出来るだけ丁寧<sup>(39)</sup>に講義したいと思いますので、不読段と言われている部分も、一往解説することにする」(二七頁、解説の項)

## ◎菩提心論

○吉祥真雄『菩提心論講義』(一九二〇年)<sup>(39)</sup>

【菩】「論文は此の次に第三の三摩地菩提心が長々と説かれてあるけれど、此の三摩地の段は秘密に亘るから、不読段として上来の文と離して講伝することになって居る。今日では聖教の出版もせられ、事相上のことが雑誌の上で論議せられる程だから、不読段だからとて憚らないでもよいやうではあるが、『菩提心論』の講義と云へば、是れで一段落とするのが慣例となつて居るから、今もここで擱筆にしておかう。三摩地段の講義は後日改めて執筆したいと思つて居る」(一〇〇～一〇一頁)

○神林隆浄『菩提心論講義』(一九二三年)<sup>(40)</sup>

【菩】「古來行願と勝義との二章は教相なりとして、何人も講ずることを得れども、独り三摩地の一章に至りては、事相なりとして、阿闍梨の伝授に譲り、猥りに講述せざるを例とす。今は講述の次で、三摩地の章を説く。但し実修実践を志すものは、更に明法の阿闍梨に付て、口伝を受くべし」(三～四頁)

○『昭和新纂 国訳大藏經』宗典部第二卷(一九二九年)<sup>(41)</sup>

【菩】「以下は三摩地の菩提心を釋す 此釋段は普通不讀として未灌頂の人は讀まざることとす(ママ)」(七八頁、註五)

○岡田契昌『原文対照 和訳真言十卷章・広付法伝』上卷(一九二九年)<sup>(42)</sup>

【菩】「第三三摩地菩提心とは、三摩地(Samadhi)とは梵語で、等持(散乱心を統制すること)と訳す、本書に、

惟真言法の中にも即身成仏するが故に、是れ三摩地の法を説く、諸教の中に於て闕して書せずといふ文があるが、三摩地段は秘密に亘つて密教の甚深の教を説く所であるから、古来不説段として漫りに説かない。要は真言行者が三密の妙行を修し、五相成身の觀を鍊ることである」(二二頁)

◎秘藏宝鑰

○寺島光法『秘藏宝鑰講義』(一九〇〇年)<sup>(43)</sup>

【宝】「此ノ三摩地段ニ就テ古來ノ相傳ニ云ク、菩提心論ノ三門ノ中ニ於テ行願勝義ノ二段ハ教相ニ依テ之ヲ談シ、三摩地段ハ事相ニ就テ之ヲ習フト、今亦之ヲ襲フテ釋ヲ省ク」(二九七頁)

○『昭和新纂 国訳大藏經』宗典部第二卷(一九二九年)<sup>(44)</sup>

【宝】「又龍猛菩薩云云」真言宗にては此文以下を以て傳授を要するものとして普通の席に於ては講義せざるものなり」(二二五頁)

○高井觀海「秘藏宝鑰講義」(一九三四年)<sup>(45)</sup>

【宝】「古來此の菩提心論三摩地段の引証文は、常の教相談義の時は不説段として講読せず、事相門に於いて講伝することになっている。勿論菩提心論に於ても行願・勝義の二説段は講読するけれども、三摩地段は講ぜぬことに相伝されている。今先徳の疏釈を披覽するに、その积相区々にして、三摩地段の积下一定せず。一義によれば、「此の一段(三摩地段)は秘密内証の義門にして顕説すること難し。故に講説を省く」と述べられ、又「略解」には、「相承の伝に云く、彼の論の三門中に於て、行願勝義の二段は教相に依つてこれを説き、三摩地段は事相に就て

之を習ふと。所以に今此一段科註を開くのみ」と記されている。

蓋し此の三摩地段は、秘密莊嚴心の内景を直観し、直言陀羅尼の奥殿に直参せしむる白道を闡明している。所謂自証聖智の法門・果上の宗教を開説せるが故、密教的教養なく又如法の行位をも了せざる初学者に対して、その秘義を開説することは、到底不可能であると共に又その聖教を冒瀆することになるのである。此の点に関して大師は本書の終りに至りて親しく御勸誠なされ、真言密教の実義は「帥爾そじに談じ難し、若し実の如く説かば、小機は疑を致し、謗を生じて、定んで一闡提無間の人とならん」と述べられ、遂に「面にあらずんば説き難し」と仰せられている。実の所此の三摩地段は主として真言密教の実修観行（五相成身観・三密観・月輪観・阿字観）を説くが故に、講説のみに依つては領解し能はざる所が多い。又文相に顕はれた意味ばかりでなく、実修の上に於て種々の口訣が相伝されているから、事相門の伝授によらなければならぬ。かかる意味からして此の講義では、文々句々に深義を顕説することを憚り、講読の便宜上唯だ分科を分ち、その大意を略述して、秘密莊嚴心の遠景を望見することにしたのである」（二三七～二三八頁、要義の項）

○小田慈舟『十卷章講説』下（一九八五年）<sup>(46)</sup>

【宝】「第四証文の菩提心論の文は最も重要な部分であるところの三摩地菩提心を明かしている文の全文である。高祖は二教論にこの菩提心論を密蔵肝心論と云うていられるが、恐らくここに引用する三摩地段の文が真言密教の深義を説くからであろう。この中には阿闍梨から指授を得ねばならぬ事相上の深義を説く故に、高野山では古來教相不説段として、普通の講義にはこれを説かないことになっている。しかし全然これを省略しては高祖の御意を伝え得ないことになるから、その内容の一部だけは示すことにする。この文は初めに真言行人が無上菩提を証するには法爾に普賢大菩提心を住し、自心の形は満月輪の如しと観することを説き、次に金剛界三十七尊を説き、阿字菩提心の義を讚じ、阿字観を説き、更に真言行人は五相三密の行を修して即身成仏することを説いている。

論の全体の講義は簡単なが菩提心論の講義でのべているので、今は重複をさけてこれを省略する」(一一二四頁)

四 不読段に関する近現代の記述から見えること

近現代の学匠の不読段に対する記述を概観し分析すると、諸学匠が受け継いだ伝承は全てが一致するわけではなく、また不読段への対応も様々であることが判明した。以下、《不読段の範囲の相違》、《不読段の伝承方法の相違》、《諸学匠における不読段への対応》という三点から見てゆきたい。

《不読段の範囲の相違》

『弁頭密二教論』『即身成仏義』には多くの不読段が含まれるが、その範囲は学匠によって広略の相違があり、表によって示すと次のようになる。

【図1】『弁頭密二教論』

著者	書籍	弁①	弁②	弁③	弁④	弁⑤
——	『昭和新纂 国訳大藏経』					○
高井観海	『大藏経講座』 弁頭密二教論講義	○	○	○	○	○
亀井宗忠	『国訳一切経』 諸宗部二〇	○	○	○	○	○
小田慈舟	『十卷章講説』	○				
那須政隆	『辯頭密二教論』の解説』	○	○	○	○	○

【図2】『即身成仏義』

著者	書籍				
高井観海	『大蔵経講座』即身成仏義講義	○	○	○	弁①
吉祥真雄	『即身成仏義講説』		○	○	弁②
小田慈舟	『十卷章講説』		○		弁③
那須政隆	『辯頭密二教論』の解説』	○	○	○	弁④

表からわかるように、高井観海・亀井宗忠・那須政隆の不説段は広範であり、吉祥真雄・小田慈舟が伝える不説段は限定的である。いかなる理由によって、このような相違が生じたのかは、より先学の著作に遡及し調べる他ないが、古義・新義等、流派の相違にもとづく可能性も考えられる。

### 《不説段の伝承方法の相違》

真言密教では、伝法の方法として古来、講義・講伝・伝授の三種が挙げられる。一般的な説では、教相的内容は講義（未灌頂者でも可）により、事相的内容は伝授（已灌頂者が対象）によるとされ、事教二相にわたる内容は講伝（已灌頂者が対象）によるとされる。

講義の場で不説段を扱うことは、諸学匠ともに否定的であるが、講伝によるのか、伝授によるのかは一定しない。『昭和新聞』国訳大蔵経』および神林隆浄は、阿闍梨からの伝授によるとし、一方、高井観海・吉祥真雄・亀井宗忠は、講伝によると述べている。小田慈舟は、「講授」と述べており、講伝・伝授を指すものと解される。

このような相違が生じた背景は不明であるが、単なる表記上の問題とも考えられる。高井観海等の記述を勘案する



ならば、不読段の伝承は基本的に講伝で行われ、五相成身觀や阿字觀等の実修のみ伝授が要請されたものとも考えられる。

### 《諸学匠における不読段への対応》

不読段に対する近現代の諸学匠の意識は、「古来の慣例であるから遵守する」というので一致するが、その解説をめぐっては対応が分かれている。

不読段の解説について、特に慎重なのは、『昭和新纂 国訳大藏經』や、高井觀海・亀井宗忠・岡田契昌・寺島光法等等である。その理由として、高井觀海や亀井宗忠は、実際に密教の事相を履修しなければ、記述の真意を理解することができないと述べている。さらに、高井觀海においては、密教の素養、定められた行位を満たしていない初学者に対して、むやみに解説することは聖教の冒瀆にあたるとし、あくまでも面受によることを強調している。しかし、これらの慎重な者であっても、多くの場合、訓読や現代語訳を提示しており、その意味では、完全な不読に徹したとも言い切れない。

一方、解説について比較的、寛容な態度を示したのは、吉祥真雄・那須政隆等である。

吉祥真雄は、大正九年（一九二〇）に『菩提心論講義』を著したが、この時点では、慣例にしたがい三摩地段の解説を省略した。この時に「三摩地段の講義は後日改めて執筆したいと思うて居る」と述べ、実際に大正一五年（一九二六）刊行の『菩提心論講話』で、詳細な三摩地段の解説を行った。昭和九年（一九三四）刊行の『即身成仏義講説』でも、不読段と断わった上で、その解説を試みている。吉祥真雄は、不読段の解説に踏み切った理由として、当時すでに多くの聖教が出版され、事相の問題が雑誌で自由に論議されていることを挙げている。

那須政隆は、昭和五年（一九八〇）刊行の『即身成仏義』の解説において、「この度は種種の方が読者となつていられるし、また筆者の私自身としても、出来るだけ丁寧に講義したいと思しますので、不読段と言われている部

分も、一往解説することにする」と述べ、きわめて積極的な態度を示している。しかし、昭和六二年（一九八七）刊行の『辯頭密二教論』の解説』では一転して慎重となり、不読段を理由に、詳細な解説を控え、その前提として専門教師の指導を受けることを勧めている。その翻意の理由は不明であるが、やはり不読段をめぐる、広く一般に開示すべきかどうか葛藤があったものと推測される。それでも同書中、一般の人であつても、専門教師の指導があるならば、秘密法を受けることを容認しており注目される。

小田慈舟は、慎重な態度を示しながらも、高祖弘法大師の御意を人々に伝えたいという信念から、限定的な解説を試みている。そして、不読段を註釈する先例として、古義・新義の諸流派にわたり、多くの学匠の名を挙げている。具体的には、『弁頭密二教論』について、頼我（二三〇四〜三三七九）、等空（一八〇三〜一八五七）、戒定（生年不詳〜一八〇五）等、また『即身成仏義』について、頼瑜（一二二六〜一三〇四）・杲宝（一三〇三〜一三二六）・宥快（一三四五〜一四一六）等である。このような指摘は、今後、不読段の由来や歴史的経緯を調べる上で、重要な手がかりとなるであろう。ただ、これらの註釈は当然、一般公開を前提とした著述ではなく、その意味では、近現代の諸学匠が行った解説とは、本質的に一線を画することを意識しておかなければならない。

## 五 小 結

最後に、十巻章の不読段について本論で判明したこと、あわせて今後の課題を簡条で示しておきたい。

○十巻章のうち、灌頂や観行等の事相に関わる記述は不読とされ、講義ではなく、講伝あるいは伝授によって伝承されてきた。実際にどのような形で不読段の箇所が講伝・伝授されたのか、また近現代でも継続されてきたのか、その実態は不詳であり、今後の課題である。

○不読段は『弁頭密二教論』『即身成仏義』『秘蔵宝鑰』『発菩提心論』に含まれるが、近現代の諸学匠が指示する不

読段の範囲には、広略の相違があることが判明した。その相違の理由は不明であるが、今後、特に流派の相違に注目して検証を進めてゆきたい。

○不読段の伝統は、近現代において徐々に希薄となつていったが、その理由として、多くの聖教が出版・公開されたこと、また事相上の問題が自由に議論されるようになったこと等が挙げられる。このような状況下、近現代の学匠は葛藤しながらも、不読段の訓読や現代語訳を行うようになり、徐々に内容解説等が一般化していったものと考えられる。

○小田慈舟の指摘によれば、近代以前でも、頼我・等空・戒定や頼瑜・杲宝・宥快等の一部の学匠は、不読段の註釈を行なつたという。これらの註釈類の検証は、今後、不読段の由来や歴史的経緯を調べる上で、重要な手がかりになると思われる。

〈キーワード〉十卷章 不読段 弁頭密二教論 即身成仏義 秘蔵宝鑰 発菩提心論

註

(一) 十卷章の素読とその意義については、上田照遍(二八二八～一九〇七)『照遍和尚全集』第一輯・真言部第一(照遍和尚全集刊行会、昭和六年・一九三一年)に収められた「真言宗学科表註」に次のように述べられている。

「学科表宗部 初級

十卷章 三教指帰 性霊集 秘符論 住心品

註して曰く、初級は、列する所の書を素読するを学術とす。

自宗の経論等を素読するに、三種の利有り。何をか三種の

(二) 中川善教(一九〇七～一九九〇)『十卷章・漢和对照』(高山出版社、昭和五二年・一九七七年)では、凡例において十卷章における不読段の概略が示されている。

「一、『即身義』二教論」下『宝鑰』下『菩提心論』に、法義の深理に依る伝授の箇所「不読」がある。素読伝習の折も除いて読まぬならわしであり、このところには一切手

入れをしていない本もあるが、今は総て点をさしておいた」  
(三頁)

「一、十卷章は単に自宗教学の基礎となる講本ということにとどまらず、これは法談論議にも及ぶ伝統をふまえた法儀的な、一つの型としての要素を含んでいて、古来その点にも意を用いられていることを考え合わせて読んでおいた」  
(五頁)

(3) 例えば、金岡秀友『空海 即身成仏義』(太陽出版、昭和六〇年・一九八五年)は、東洋大学や朝日カルチャー・センターなどでの講義をもとに出版されたものであるが、その註では、以下のような記述が見られる。

「(八)『三密加持すれば速疾に顕る』という句を説明するために、この段より証拠となる経文を四つ紹介しているが、これらは古来、秘伝に属するものとして、一般の公開講読は差し控えられ、不説段とされてきた部分である。しかしここでは、「即身成仏義」の理解のために、できる限り読んでゆくことにする」(一二五頁)

(4) 十卷章として以下の三種が一般的用いられるが、本論では便宜上、「(智山版)」「(豊山版)」「(高野版)」と呼ぶこととした。  
「(智山版)」「真言宗十卷」(大正大学真言学智山研究室編、真言宗智山派宗務庁、昭和六年・一九八六年)  
「(豊山版)」「真言宗十卷章」(豊山長谷寺藏版、真言学研究室、昭和五年、一九八〇年)

「(高野版)」「十卷章」改訂版(高野山大学出版部、昭和四一年・一九六六年) \*旧版(一九四一年)

以下、本論中の引用文は、主に「(智山版)」を底本としたが、便宜上、「(豊山版)」「(高野版)」の頁数も挙げることにした。

(5) 『大正藏經』二〇卷五三五頁b・c段(大正藏No.一二二五)。「(智山版)」「二二〇二頁、(豊山版)」「五〇丁右〳左、(高野版)」「一〇九〳一一〇頁。【即③】でも引用される(註23参照)。」

(7) A『大正藏經』一八卷二五三頁c段〳二五四頁a段(大正藏No.八六七)。  
B『大正藏經』一八卷二五四頁a段(大正藏No.八六七)。

(8) 「(智山版)」「二二頁、(豊山版)」「五〇丁左〳五二丁右、(高野版)」「一一〇頁。『瑜祇經』の原文を直接引用したものではなく、取意の文。その原文は【弁⑤】で引用される(註17参照)。」

(9) 「(智山版)」「二二頁、(豊山版)」「五二丁右、(高野版)」「一一〇〳一一一頁。

(10) 『大正藏經』一八卷二八八頁a段(大正藏No.八七〇)。  
「(智山版)」「二三頁、(豊山版)」「五二丁右、(高野版)」「一一一頁。

【弁④】でも引用される(註15参照)。

(12) A『大正藏經』一八卷二八七頁c段〳二八八頁a段(大正藏No.八七〇)。  
B『大正藏經』一八卷二八八頁a段(大正藏No.八七〇)。

(13) 「(智山版)」「二三頁、(豊山版)」「五二丁左、(高野版)」「一一二頁。

(14) 「(智山版)」では、同箇所を「以獻毘謂金盧遮那」とするが、他版を参照に「以獻毘盧遮那」と改めた。

(15) 「(智山版)」「二四〳二五頁、(豊山版)」「五二丁右〳左、(高野版)」「一一三〳一一四頁。【弁③】でも「自受用佛從心…各說自證三密門」までが引用される(註11参照)。」

十卷章の不読段に関する一考察

- (16) 『大正藏經』一八卷二五三頁c段～二五四頁a段(大正藏No. 八六七)。
- (17) 『智山版』二五～二六頁、(豊山版)五三丁右～五四丁右、(高野版)一一四～一一七頁。実際の本文では、弘法大師の註釈が割註の形で多く挿入されるが、不読に当たらないので、ここでは割註を除いた。
- (18) 『大正藏經』一九卷三三二頁c段(大正藏No.九五七)。
- (19) 『智山版』三八頁、(豊山版)六丁左、(高野版)二五頁。
- (20) 『大正藏經』一九卷六〇二頁a段(大正藏No.一〇〇〇)。
- (21) 『智山版』三八～三九頁、(豊山版)六丁左～七丁右、(高野版)二五～二六頁。
- (22) 『大正藏經』二〇卷五三五頁b～c段(大正藏No.一二二五)。
- (23) 『智山版』三九～四〇頁、(豊山版)七丁右～左、(高野版)二六～二七頁。弁①でも、若依毘盧遮那佛：超越二乘十地」までが引用される(註6参照)。
- (24) 『大正藏經』二〇卷五三九頁a段(大正藏No.一二二五)。
- (25) 『智山版』四〇頁、(豊山版)八丁右、(高野版)二七頁。
- (26) 『智山版』一四四～一四八頁、(豊山版)一一〇丁左～一一四丁左、(高野版)二二二～二二九頁。本論では紙数の都合上、本文を省略した。
- (27) 『大正藏經』三三卷五七三頁c段～五七四頁c段(大正藏No. 一六五五)。
- (28) 『智山版』二二二～二二七頁、(豊山版)九四丁右～九七丁左、(高野版)一九四～二〇一頁。『発菩提心論』からの引用であり、本論では紙数の都合上、省略した。
- (29) 本論執筆にあたり、鼎龍暁・長谷宝秀・梅尾祥雲・上田照遍・大山公淳等の著作も検討したが、特に不読段への言及が見られなかったため、本論では取り上げなかった。
- (30) 『昭和新纂 国訳大藏經』宗典部・第二卷(国訳大藏經編輯部編、代表三井晶史、東方書院、昭和四年・一九二九年)。なお同書には『即身成仏義』も収録されるが、そこには不読段の指示が見当たらない。なお本論の引用では読みやすさを考慮して、原文の旧漢字を、可能なかぎり常用漢字に変換して表記した。以下の引用も同様である。
- (31) 高井観海(一八八四～一九五三)『弁頭密二教論講義』(『大藏經講座』第一五卷、東方書店、昭和九年・一九三四年)、四九〇頁。『高井観海著作集』第二卷(うしお書店、平成二二年・二〇〇〇年)再録。他にも『即身成仏義・弁頭密二教論講義』(昭和二年・一九二七年)、同書復刻版(名著出版、昭和五年・一九七六年)がある。
- (32) 亀井宗忠(一九〇四～一九六七)没年不詳)『国訳一切経』諸宗部二〇(大東出版、昭和二年・一九三七年)。なお同書には、『即身成仏義』『秘蔵宝鑰』が収録され、那須政隆による国訳が示されるが、ここでは全く不読段について言及されていない。
- (33) 小田慈舟(一八九〇～一九七八)『十卷章講説』下卷(高野山出版社、昭和六〇年・一九八五年)。
- (34) 那須政隆(一八九四～一九八七)『辯頭密二教論』の解説(成田山新勝寺、昭和六二年・一九八七年)。
- (35) 高井観海『即身成仏義講義』(『大藏經講座』第一五卷)。註

- 31参照。
- (36) 吉祥真雄（一八八三～一九四三〔没年不詳〕）『即身成仏義講説』（山城屋・藤井文政堂、昭和九年・一九三四）。同書復刻版（山城屋・藤井文政堂、昭和五年・一九七七年）。
- (37) 小田慈舟『十卷章講説』上卷（高野山出版社、昭和五九年・一九八四年）。
- (38) 那須政隆『即身成仏義』の解説（成田山新勝寺、昭和五年・一九八〇年）。
- (39) 吉祥真雄『菩提心論講義』（山城屋・藤井文政堂、大正九年・一九二〇年）。
- (40) 神林隆浄（一八七六～一九六三）『菩提心論講義』（加持世界社、大正二年・一九一三年）。
- (41) 『昭和新纂 国訳大蔵経』宗典部・第二卷。註30参照。
- (42) 岡田契昌（生年不詳～一九二〇～一九四一〔没年不詳〕）『原文対照 和訳真言十卷章・広付法伝』上下巻（宗典発行所、昭和四年八月・一九二九年）。
- (43) 寺島光法（生年不詳～一八九八～一九〇五〔没年不詳〕）『秘蔵宝鑰講義』（哲学館仏教専修科仏教講義、哲学館、明治三年・一九〇〇年）。
- (44) 『昭和新纂 国訳大蔵経』宗典部・第二卷。註30参照。
- (45) 高井観海『秘蔵宝鑰講義』（『大蔵経講座』第二四巻、東方書店、昭和九年・一九三四年）。『高井観海著作集』第二巻再録。
- (46) 小田慈舟『十卷章講説』下巻。註37参照。